

「力が入った後は、ふわあっと抜くよ。フーツ」
 柔らかな光が差し込む畳が休止に追い込まれたこの部屋。助産師の大西由希子さん(三十九)は、痛みに必死に耐える四元優子さん(二十九)倉敷市北畝IIの脚や腰をさすっていた。
 木造瓦ぶきの外観が住宅街にとけ込む「さくらんぼ助産院」(同市水島南春日町)。陣痛が始まってもう約二十二時間。四元さんは立ったり座ったりと姿勢を変え、最後は大きなゴムボールの上うつ伏せになった。
 「そう、そう。上手、上手。頭が出たよ」
 「んぎゃあ」。すると出た小さな体が元気な産声を上げた。

同助産院は二〇〇六年十月に開業。助産師六人による丁寧な妊婦健診やマッサージ、食事指導などで人気だ。だが、そもそも水島協同病院(同所)の産科が休止に追い込まれたことが開設のきっかけだった。

〇六年夏、医師一人が他病院に異動。子育て中の女性医師一人だけになり、分娩継続が困難になった。分業継続が困難になった。病院に残るべきかどうかを迷っていた助産師たちに、病院側が提案したのは「独立」だった。

運営主体は病院と同じだが、医師は置かない「院外助産院」。現所長の柏山美佐子さんは病院の倉庫だった民家を改築し、開設にこぎつけた。

出血などいざという時には、同病院と連携。リスクが高いとみられる分娩はより体制の整った市内の別の病院を紹介する。

産科施設の閉鎖が相次ぐ中、地域のお産場所を守った同助産院。これまで

⑦役割分担

お産 きむ

助産師自立 地域の力に



子どもを取り上げ、母と対面させる大西さん(左)。産科医不足の中、助産師の働きに期待が集まる—倉敷市、さくらんぼ助産院

約八十人の誕生を見守った。

かつて、助産師は地域のお産の中心だった。戦後、病院などでの出産が増える

「正常分娩は助産師が担当し、リスクがある分娩は医師にまかせる『役割分担』ができれば、忙しい医師の負担軽減につながる」と厚生労働省看護課。〇八年度も「助産師外来」の設置を

岡山県内で働く助産師は〇六年現在、三百六十九人。こうした人的資源を活用し、県内では倉敷成人

ただ、近年の医師不足で再び注目が集まる。産科医の過重労働の背景に、本来から医師不足解消の一環として、院内助産院や助産師を医療が専門の医師が中心で担っている点があるから

ただ、現在の医師中心の分娩では、施設勤務の助産師はともすると経験が不足しがち。このため、岡山大学院保健学研究科はより高度な知識、技術を身に付けてもらおうと「ステップアッププログラム」を二、三月に行った。

「まず妊婦や胎児の異常を見つける目を養うことが大切」と担当した中塚幹也教授(母子看護学)。普段は医師が扱う超音波検査なども指導した。

「お産の危機は医師不足だけで語られがちだが、助産師が自立していけば、地域のお産の大きな戦力になる」